

波のグラウリヤ

正岡美香

『……是に於いて乗船せしに、風向は甚だ逆にして海荒れ、予は熱と疼痛加はり知覚を失ふ程なりしが、神恵に依り安全に Xiuaqui (塩飽) に着きたり。船頭は同所まで安全に予を送り届くる約束にして、予は其の友の如き家に迎へ入れられ厚遇を受けたり。予は病重かりしたため八日間滞在せしが、ジョアンは其の間異教徒等に説教し、宿の主人は其の勇気なかりしも、主婦のみは帰依したり。』

(「耶蘇会士日本通信」より、イエズス会日本布教長カブラルの書簡)

(一)

天正二年(一五七四年)三月。瀬戸の海は冬から春へと移り変わる時季で、天候が定まらない。冷たい風で波が荒れ立つ日も多く、島々が連なり潮も複雑な備讃瀬戸は、操船の巧みさで知られた塩飽衆の水夫たちの、腕の見せ所でもあった。

昏下がり、塩飽本島の南側にある泊の港は風待ち、潮待ちの船が停泊し、荷下ろしの水夫や船の乗り換えを待つ旅客でにぎやかである。備讃瀬戸の真ん

中に位置するこの島は、九州と京、大坂方面を結ぶ航路の中継地として重宝されていた。九州を発した荷や旅客は、芸予諸島の島伝いに四国の北岸を巡り、ここで船を乗り換えて備前児島へ、さらに播磨や難波、堺へと向かっていくのである。

「おかみさん、もうし、おかみさーん！ 頼みますよう、客やでえ！」

船宿「円や」の前で、船頭のさへえが呼ばわっている。その声にこたえて、客でこった返す木戸口から

「はあい！」

と愛想の良い返事をして出てきたのは、「円や」の主人・東次郎の女房のたえであった。年の頃は三〇歳より少し前、色白のうりざね顔に、切れ長の眼差しが利発そうな、田舎の島にしてはなかなかの美人である。黒髪を首の後ろで束ねた上から、埃除けの頭巾をかけ、地味な青色の小袖を踝が見えるほどに短くたくし上げて、いかにも働き者といった装いのたえは、さへえの顔を見て、

「あれ、さへえさん、今日は久しぶりにお泊まりかいな？」

「いやいや、儂と違う。儂が乗せてきたお客んじや」顔の前で手を振って、さへえが言う。そうして、後ろを振り返って手招きをした。たえもそちらを見

る。

歩み寄ってきたのは、異体の二人連れであった。二人とも断髪の頭に黒い小さな帽子をかぶり、ぞろりとした黒い長衣で身を包んでいる。若い方の男に支えられながら歩いている年かさの男は、異様に肌が赤く、鼻が大きい。黒い帽子の下からは、茶色く波打つ髪がもしやもしやと伸びている。太い眉とぎよろりとしたドングリ眼の顔は、何やら苦痛にゆがんでいた。一目で、日本人ではないとわかる風体である。

いっぼうの若い男は、異国風の服装をしてはいるが、まったく日本人らしいすらりと細い鼻梁とまなじりをしている。年はまだ二十歳をいくらかも超えていないだろう。武士ではなく、どちらかというところの細い体つきをしているのが、長衣の上からでもわかる。年かさの男を気づかいながら、たえに気づいて、軽く頭を下げた。

たえは、ちよつと驚いたふうで、

「あれまあ、パーデレさんな」

と、さへえに聞いた。さへえはうなずいて、

「濃の船で今治から乗せてきてな、堺行きの船に乗り換える言うんやけど、何やら船中で具合が悪うなられてな。治るまで居らしてもらえんやろか。パーデレさん泊めるんは初めてかいな？」

「いや、このお方とは違うけど、前に船待ちで寄られたことはあったわな。部屋の空きはあるさかい、まあお入り」

たえは愛想良く言つて、腰をかがめて手招いた。若い男がうなずいて、年かさの男を支えながら歩み寄ってくる。その若者には言葉が通じるのだとわかつたたえは、

「具合が悪いんやったら、他のお客さんと一緒にならん方がええねえ。狭うてもかまわなんたら、二階が一間空いとるけど」

「お氣遣い、誠に有り難う存じます。何日の逗留になるやらわかりませぬが、何とぞよしなに」

若者が、ていねいな言葉遣いで応えたので、たえはちよつとびつくりした。武士以外で、こんな言葉遣いをする人間を知らなかつたのだ。

その、何やら見慣れない風体の二人連れが、女中の案内でゆつくりと階段を上がつていくのを見送つて、たえは木戸口で立ったまま、さへえに聞いた。

「あの若い方の人はどこの人な？」

「儂は今治から乗せたけん知らんけどな、パージェさんと一緒なら豊後から来られたんやろ。パージェさんがたはみんな豊後に住んどるけんな」

「ふうん、長いこと居られるんやったら、おなごが要るやろか。うちの子ら、よう相手するかいの。あ

の若い人やったらまあええやろけど、あのパーデレさんはなあ」

たえは、ちよつと首を傾げた。

「円や」は泊の湊でただ一つの宿であつて、木戸口を入ると、土間に続いて食堂を兼ねた板敷の広間がある。そこから奥に続く廊下の両側に客室が並び、さらに狭い階段を上った二階にも、屋根の勾配を活用了た部屋がいくつあつた。一階のさらに奥に、東次郎ら家族の住まいと、下男や女中たちの部屋がある。さらに、平屋を長屋のように小さく区切つた別棟があつて、そこには客の相手をする女を何人か置いていた。塩飽は小さな島のこととて、他に繁華街も遊び場もない。唯一の宿の「円や」は、唯一の遊女屋も兼ねていたのである。

たえの言葉に、さへえは慌てたように顔の前で手を振つて言つた。

「女将さん、何言いよんな。パーデレさんは女は要らんで。坊さんとおんなじや。女犯は罪やて言いよるで」

「まあ、ほんまな。坊さんとおんなじやったら稚児さんかな。ほんなら、あの若い人がそうかいの。それにしてはえらい臺が立つとるけど」

身も蓋もないたえの言葉に、さへえが何と言つていいのか肩をすくめたところで、

「あの、申し」

と後ろから声がかかった。

「わあ！ ああ、はいはい、何でございましょう」
「当の若者が、いつの間にか後ろに立っていたので、
たえは慌てて、ついていねいな口調になつてしまう。
「あの、連れが喉が渴いたと申しておりますゆえ、
少々水をもらえませぬか。それと少しばかり、塩を」
「はいはい、それだけでよろしゅうございますか。
他に何か、召し上がりものは」
たえの問いに、若者は少し困つたような表情で答えた。

「いえその、連れは魚も米も好みませぬゆえ。食物は少しばかり持参しております」

「まあ、パーデレさんは食べるもんが違ふんやねえ。貴方様もそうなん？」

「いえ私は、魚も米もありがたくいただきます。皆さまと同じでございますよ」

男はちよつと笑つて答えた。

「私は歴とした日本人、周防山口の生まれでございます。名はジョアン、トルレスのジョアンと申します」

「じよあんさん？ それが法名でございますか。どんな字書くんかいの。如庵？」
指を上げて宙に漢字を書いてみせたたえに、ジョ

アンは苦笑して、

「いえ、法名とは言いませぬし、漢字でも書きませぬ。主なるデウスに仕えるための洗礼名と申しまして、ローマ字、横文字で書くのです。Juanと。連れはカブラルと申します。あちらはポルトガルの方ですが」

「はあ」

ぼるとがる、と言われてもどこにある国やらわからない。たえはほかんと、ジョアンと名乗った男の顔を眺めていた。

ジョアンが水瓶と塩の入った小さい壺を手に、ぎしぎし鳴る階段を二階へ上がっていくと、狭い板敷きの部屋の隅でカブラルが座り込み、頭に手を当てて唸っていた。

「パーデレ・カブラル、水と塩をいただいでまいりました」

「うむ」

ジョアンが差し出す水瓶と塩壺を受け取ったカブラルは、塩を指先に少しつけて舐め、水をごくりと飲んだ。

「お加減はいかがですか。あまり頭が痛むようでしたら、宿の者に薬をもらってまいりましょうか」
そう言ったジョアンを、カブラルはぎろりとにら

みつけた。

「イルマン・ジョアン、私がそのような薬を飲めると思っているか。わけのわからぬ蛮国の薬など、かえって悪くなってしまうわ」

「はい」

ジョアンはうなだれて、言葉を飲み込んだ。カブラルが日本を文化後進国と思っており、さげすんだ言い方をするのは常々のことだった。